

の視野を全国に広げたと理解できる。

ところが、一九三七年六月『民間伝承』二一〇での太田「農業関係俚諺の地域性」(『近畿民俗』二二二)の紹介を最後にして、ほぼ一年間、論文紹介や関連学会活動の報告から、太田の名前が見えなくなった。彼が編集の任にある『近畿民俗』も、これ以降休刊となった。翌年一月になって初めて「発行所を京都帝国大学国史研究室内、近畿民俗学会に移し、年四回の刊行にて、創刊号を本年四月に出すことに略々決定した」(『民間伝承』三一五)とその復刊が報告されているものの、実際の復刊は戦後の一九四九年二月を待たなければならなかった。

今、その理由を明らかにすることはできないが、戦争の進行と役所の事務の多忙などが考えられる。しかし、太田の民俗学に対する情熱は冷めることなく、宮本常一は中国の太田から「近畿民俗の事は気になつて居られた様で、何とかして続刊してほしいといふおたよりもあつた」⁽³³⁾と回想している。

2 「中支」での観察

一九三七年七月十八日、兵庫県郷土研究会の第五回談話会は神戸三菱クラブで開催され、栗山一夫、太田陸郎など六人が出席した⁽³⁴⁾。

『民間伝承』の創刊とほぼ時期を同じくして『兵庫県民俗資料』が停刊し、主宰の太田が近畿地方の中心人物として日本民俗学の全国規模の組織化に取り組んでいたが、民間伝承の会の都市とくに東京を中心とする状況を批判し続けたマルクス主義民俗学者・栗山一夫(赤松啓介)は兵庫県で地域研究的民俗学を試み、兵庫県郷土研究会をつくり、ほぼ独力で機関誌『兵庫県郷土研究』⁽³⁵⁾を発行し続けていた。太田は直接投稿していなかったようであるが、機関誌創刊の二月に娘を連れて、はるばる同研究会が組織した大部村王子での第二回実地演習に参加する⁽³⁶⁾など、栗山の研究会を最初から支持していた。

表10 『民間伝承』 会員応召関係記事一覧

号数	刊行年月	登載欄	内容
3-1	1937年9月	近畿民俗学会	河本正義が従軍記者、玉岡松一郎が兵士として中国へ
3-3	11月	編輯雑記	例集会は応召その他の影響を受けた
3-10	1938年6月	近畿民俗学会	玉岡は再召集され、5月中旬中国前線へ
3-12	8月	近畿民俗学会	幹事太田陸郎が7月召集され、中国へ出発
4-2	11月	学会消息	前年中国戦線に赴いた島根の小林伝十は戦傷死
4-6	1939年3月	大阪民俗談話会	玉岡は病気で帰還、ほぼ失明状態に
5-1	10月	大阪民俗談話会	橘文策が満洲国通信社に入社、太田の所属が変更、玉岡は快癒して退營、岸田定雄が応召される

出典：『民間伝承』 各号より作成。

この第五回談話会では、考古学の和島誠一による講演の後、太田の話題を中心に民俗談が繰りひろげられた。話題は勃発したばかりの戦争に転じ、太田は同席した玉岡松一郎が召集されるだろうと冗談で言ったが、その予言は的中し、八月四日に玉岡は入営した³⁷。玉岡の中国行きは、近畿民俗学会の名義で『民間伝承』でも報じられ、同種報告の第一号となった（表10参照）。

それから一年経たずして予言者の太田も召集され（一九三八年七月一日）、まもなく中国へ出発した（八月六日）。『兵庫県郷土研究』は七月十五日早速このことを報告した³⁸。『民間伝承』ではその後の三一一二（八月）に「近畿民俗学会」の名義で報じられた。なお、太田の不在によって、近畿民俗学会は実質機能停止となり、これ以降大阪民俗談話会はそれにとつてかわり、大阪を中心とした民俗学活動を『民間伝承』に報告するようになった。

太田の中国行きに先だって、五月に一旦帰還した玉岡は再び召集され、中国に赴いた³⁹。一九三七年十二月日本軍は南京を陥落させ、翌年一月には国民政府との和平交渉を中止、四月に不拡大方針を放棄し、徐州を占領した。その後、戦局の早期終結のために武漢攻略が決定され、七月に作戦の準備が進められていた。玉岡の再召集と太田の召集には、このような背景があった。

武漢攻略の主力は岡村寧次中将が指揮する遼江作戦の第十一軍、及びそ



図6 軍服の太田陸郎

出典：沢田四郎作「太田陸郎伝」『日本民俗学大系』6所収、1958年、393頁。

れに協同し、大別山側から進軍する第二軍である⁽⁴⁰⁾。太田の戦地からの最初の投稿によれば、当時彼の肩書きは「中支派遣軍 片村部隊、北尾部隊気付太田（陸）部隊、太田陸郎」であった。

七月十四日上海より発令された「中支作命甲第一号別紙第二 第十一軍司令官ノ指揮下ニ入ルヘキ部隊」の戦列部隊に「波田支隊」が見え⁽⁴¹⁾、七月二二日に波田支隊が九江攻略の第一線として作戦を始め、その後、瑞昌、馬頭鎮に進軍した。この波田支隊は近藤少将が指揮する海軍の揚子江部隊と直接協力すべき遼江部隊⁽⁴²⁾であり、その管下は大佐北尾龍英が指揮する北尾碇泊場司令部があった⁽⁴³⁾。武漢攻略のため、軍隊の区分が調整され、第十一軍直轄の遼江船舶隊が組織され、陸軍少将片村四八が指揮に当たり、北尾碇泊場司令部がその配下になった⁽⁴⁴⁾。神宮皇学館の漢学者近藤空による墓誌には太田が「水上輸送隊」に属するという箇所があり、「片村部隊北尾部隊」は、間違いなくこの遼江船舶隊の北尾碇泊場司令部のことであろう。ちなみに遼江船舶隊の任務は「揚子江二沿フ作戦ノ進展ニ伴ヒ所要兵团ノ作戦ニ協力スヘシ 又長江及鄱陽湖ニ沿フ軍ノ補給運送」⁽⁴⁵⁾であった。

太田は少尉として前線に向かったのであるが⁽⁴⁶⁾、『大阪朝日新聞神戸版』（一九三八年十月二五日付）の現地記者の報道によると、太田部隊は太田以下、准尉一人、曹長一人、上等兵一人、二等兵八人からなっている。同年十一月二三日付太田部隊所属の二等兵本玉元治より太田の妻・幸子宛の軍事郵便⁽⁴⁷⁾では、「吾々揚塔隊」という表現が見え、この部隊の具体的な任務は、兵器、弾薬、資材、兵員の輸送と上陸補助とされる。

太田の「進軍中にみた支那習俗（二）」は武漢作戦が終って間もなく、十一月ごろに書かれたものだと思われる。この第一回の通信では、まだ軍の検閲がそれほど厳しくなかったのか、後になると「○○」と伏字になるはずの地名がそのまま出ている。それ

を連れれば、南京、九江、黄梅、瑞昌、武穴、田家鎮、大冶、鄂城、漢口、武昌、漢陽、大別山などで、まさにタイトルの「進軍中」というのにふさわしく、軍の進行路線とほぼ対応している。これ以降、『旅と伝説』及び『民間伝承』には、たびたび太田の名前が見られる。

太田は一九三五年あたりから、古書文献の蒐集整頓から現実社会の実情に関心の重心が移り、自分の研究の整理にも着手し始めたことは前にふれたが、そういう「愈々その知識の整頓に着手しようといふ、ちやうど油の乗りきった箭先に」⁽⁴⁸⁾、彼は中国に渡った。そして一九四二年に南方のマレーに志願転出するまで、四年近くの歲月、すなわちその生涯の研究生活の約三分の一を中国で送っていた。彼の中国に関する様々な文章は、死後一周年にあたる一九四三年十月に出版された『支那習俗』という一冊にまとめられている。『民間伝承』九一八（一九四三年十二月）では、橋浦泰雄が「本書はその五ヶ年間の採集の一部を選抜したものであつて、専ら中支の習俗五十種余を収めてある」と紹介している。

『支那習俗』は、「進軍中に見た支那習俗」「揚子江の魚と漁法」「中支奥地の鵝飼」「城壁遺存の陶磁瓦片」（一九四二年、推定、以下同様）「揚子江と倭寇」「中支の印花布」「中支奥地の旧曆歳末」「字蔵と陶磁片工芸」「金鈴盒子」（一九四一年）「金陵棲霞山仏教美術と六朝遺物」「戦地より趣味通信」「陣中随想」「闘蟋蟀」（一九四〇年）「陣中花信」（一九四一年）「支那の口碑」（一九四一年）「中支賞花習俗」（一九四二年）「中支こども習俗」（一九四一年）「娘々祭参拝記」（一九四一年）「横槩余稿」「煙塵漠々」「鄭衛余音」の全部で二一章からなっている。文章の初出などが明記されておらず、確認できた『旅と伝説』以外は、未発表のものがほとんどである⁽⁴⁹⁾。

『旅と伝説』の文章は、郷里の山窩についてのもので中国とまったく関係ない「中支より」（一九四〇年十二月）以外全部収録され、第一、二、三、五、六、七章をなし、分量も全書二〇〇頁中八四頁を占めている。『支那習俗』は長文で充実した内容を有するものほど先頭にくるように配置されていることから、『旅と伝説』で発表されたものが太田の中国研究の成果の主体と理解されよう。

収録にあたって、「進軍中に見た支那習俗」の(一)と(二)が合併されて第一章となり、一九四〇年一月の「中支より」が「中支の印花布」と改題された。本文はほぼ発表当時のままであるが、首尾の通信調の部分が削除され、一部の図や写真も外された。

太田は、最初は片村部隊北尾部隊、後に片村部隊檜垣部隊（一九三九年八月より）、田村部隊檜垣部隊（一九四〇年三月より）、田村部隊光井部隊（一九四〇年十二月より）、馬來派遣暁二九五八部隊（一九四二年七月）と、その所属が転々とした（八九頁、表11参照）。

『帝國陸軍編制総覧』（芙蓉書房、一九八七年）を参照すれば、太田の所属変化の背景がわかる。太田はまず中支那碇泊場監部（片村四八少将、一九三八年七月十五日〜）もとの北尾碇泊場（第二〇碇泊場）から檜垣貞勝少将を司令官とする第一〇五碇泊場司令部に転属した。それから中支那碇泊場監部の場監が田村節蔵少将（一九四〇年三月九日より）に変わった。一九四〇年九月に船舶輸送司令部（司令官が佐伯文郎中将、一九四〇年九月二八日より）ができると、中支那碇泊場監部がその隷下部隊となり、その下に第一〇二碇泊場司令部（光井一治大佐、一九四〇年十二月十四日より）が設置された。一九四二年七月七日、軍令陸甲第五二号により船舶輸送司令部を復帰させて佐伯文郎を司令官とする船舶司令部「暁」が新しく編成されたが、太田はこの「暁」部隊に所属した。

軍務任務の関係で地名が明記されなかったか削除された箇所が多く、その所在を特定することが困難であるが、しかし『支那習俗』に出ている地名には、上海、蘇州、鎮江、揚州、南京、蕪湖、安慶、彭沢、景德鎮、湖口、九江、瑞昌、黄梅、武穴鎮、田家鎮、大冶、鄂城、黃州、武昌、漢口、漢陽、黃陂などの市鎮、そして太湖、鄱陽湖、廬山、大別山、淮河、洞庭湖などの山川が見え、とくに安徽省、江西省、湖北省の揚子江沿岸を中心としたものが頻出している。太田やその指揮下の隊員による軍事郵便や戦地記者の報道に出る地名⁵⁰などと照合しても、太田の活動の中心はこの地域と見てよい（図7参照）。

太田の目に映ったこの「中支奥地」は、地図上では大都市である中心地の多くが実際にはまったくの田舎町で、

そこから一里も離れると農村であり、耕地も山間利用が多く、農家が川湖の漁も行い、ほとんど大陸的な感じがしない土地であったという(註)。太田はこの地の特徴をどこか故郷の置塩村の状況と重ねて見ているのだろう(図8参照)。

1 日本研究の延長

太田陸郎は、一九三九年九月『民間伝承』四―一二に三回目の通信(七月十日付)を寄せている。

民間伝承御送付下され有難く応召以来一年ぶりになつかしく炎暑下で拝見致しました。支那奥地に来れば来る程、あまりにも日本の習俗と類似の多いのに驚きます。勿論日本のその原始形がこちらにあるべきは当然とも思いますが——だから日本をよく知る者程また支那を明かに見、かつ研究する事が出来るのではないかと考

へます。だが戦争と研究とは別個のもので、小生の現在は只御奉公あるのみであります。

中国に赴いてから一年、戦争の長期化に伴い、軍隊の任務の重心は占領地の拡大から占拠地域の治安回復と維持に変わり、太田隊長も忙しい軍務の中、次第に落ち着いて考えることが出来るようになったらしい。なぜなら、太田は具体的な事象を描写するこれまでの投稿と異な



図8 太田陸郎出身地系田位置図

出典：『飾磨郡全図』飾磨郡教育会『飾磨郡風俗調査書』付録、1912年より作成。

り、はつきりと自分の中国認識や研究姿勢などを打ち出しているからである。

「奥地に来れば来る程」両国間の民俗レベルの類似の多さに気付いて驚いた。つまりかつて漠然と日本と中国との異質性を考えていたが、その想像は現実によつて修正を余儀なくされたのである。そこで太田は、日中の相似について中国の方に「日本のその原始形」が「あるべき」という理解を示し、すなわち習俗の類似を両国の歴史的交流、もつといえは中国から日本へという前近代における文化の流れの結果として認識し、それゆえに日本のことをよく知れば知るほど中国研究の可能性が大きいと判断している。そこには、民俗学を通して日本をより良く理解するために努めて来た一人の日本民俗学者としての、中国研究に対する自信が見え隠れする。

この文章は短いながら、太田の中国研究の性格を理解するための重要な点を示唆している。中国は太田にとつてまったく異質な国ではなく、昔の日本の姿を再現してくれる親しみを感じる土地であった。その論理の構造から言えば、逆に「中国をよく知る者程また日本を明らかに見、かつ研究する事ができる」ともいえる。中国研究は太田にとつて外側からという視角の違いがあるものの、日本を理解する点では、これまで視野や関心を郷土から日本に広げたことと一致しており、その意味で彼の中国研究は、これまでの日本での研究の延長線上にあるといえる。

それを証明するかのように、太田が『支那習俗』で取り上げた対象の多くは、これまでの日本で研究・発表されたもの、特に『兵庫県民俗資料』での発表と重なっている。たとえば、動植物と「播磨動植物方言抄」、水牛の利用と「牛に関する方言と俗信」「但馬牛と伝説」、娘々祭と「播磨の秋祭り」と屋台」、仲秋・盂蘭聖会と「夏の農民と土俗」、棲霞山の仏教美術と妙法寺の仏教美術調査、埋葬見聞と「大覚寺所蔵墓所関係古文書」「葬制雜記」、漁法と「高砂附近漁撈抄記」、揚子江の魚と「兵庫県淡水魚俗名集」、食用植物と「夢前川流域食用植物の方言と俗信」、陶片古拓と「播磨古瓦譜」などに、その密接な関連が窺える。

太田の論考では中国と日本の民俗学的な比較が随所に見られるが、その一つの到達点は、最後の長文「揚子江の魚と漁法」である。揚子江流域は重要な農業地帯であり、太田の駐在した地域には湖や川が多く、特に淡水魚の漁

撈習俗が豊かである。夢前川の畔にある農村に故郷を持つ太田は最初から当地域の漁業について留意し、たびたびふれているが⁵²⁾、一九四二年十二月二日に執筆された「揚子江の魚と漁法」は、これまでの総まとめという性質を有する論文である。太田は次のように綴っている。

まず農業についてはその所要器具と農耕法のあまりにも日本と相似点の多いことである。殊に水稲の挿苗から収穫までの行程、施肥の差と揚水関係を除くと故郷の田園生活と等しいといつても過言ではあるまい、其他器具もまた同様である。

農業、農具における中国と日本の近似性については、たとえば「支那輿地に来て農業を見る時まったく内地と相似て」（一九三五年七月）、「幼年時かすかに記憶にあるこれらの諸具を今眼前に展示されてその作業を見る時、何だか歌舞伎の田舎の場面でも見る心地がします」（一九四〇年一月）、「当地目下内地の二番草程度の稲であります。田草のとり方、コブリ方内地と同様です。農村の所々で、日本でいふトウス、あの木板の歯を入れ、土をつめた臼を秋の準備に作つてみますが、実に寸分変らぬ様子に驚きます」（一九四一年九月）、というように、最初から気付き、またたび論じてきたことでもある。しかし、「揚子江の魚と漁法」では、印象や感覚を理論的に整理する努力が見られ、しかも農業を漁業との対比で考察することによって、中日間の文化交流史について大きな問題提起をすることになった。

これに反して漁業についてはよほどの差を認める、凡てが幼稚なことも否めないが根底に差があるのではない。方法の多くが古態であり器具の凡ても原始的なものが多い。日支両国の差は勿論魚類、地形差にもよるだろうが、農業の両者交流に反して漁業には別個の発達を考えてみたい。（中略）日本古来の漁法についても考

えてみたい。

太田は漁業においても農業と同じく中国の方法や器具が「古態」であり「原始的」だと認めている。しかし、漁業において中国と日本の間には、農業の場合のように文化発展の段階によって理解し得る程度を超えた、根本的な差異があると感じ取り、それを説明するために農業交流説と漁業独自発展説ともいべき一対の仮説を打ち出している。その仮説が成立するか否かを論じることが本論の目的ではない。ここではただ、この発想法は日本という枠以外に立つことよって初めて得られたということ、言い換えれば太田は中国を通して日本を再発見し、それをきっかけに日本を考え直す志向を示していることを指摘しておきたい。

2 中国文化への沈潜と認識上の制約

太田にとつて、中国への理解と日本への理解は、絶えず互いに深め合う関係にあるため、中国文化への沈潜によって理解を高める必要がある。『支那習俗』から見れば、日本での研究にはないが中国では対象とされたものには、面子・叩頭（額を地面につけるお辞儀）・看熱鬧（野次馬）（「横槩余稿」）「煙塵漠々」など中国独特の文化現象以外、二つ性格の違うものが入っている。一つは先に述べた農業農具のように、日本の原型、古い姿を見ようとするものである。たとえば、藍について、太田は「又藍房があつて藍がめを見かけた、草藍が耕作されて手織木綿でそめられている、要するに日本より半世紀或いは一世紀おくられている」⁽⁸³⁾と論じている。

もう一つは、最初はまったく対象にはならなかったが、中国経験年数の増加に従い、次第に関心や理解を持つようになつたものである。茶、花、虫など中国で独特の発達をとげ、中国人の感覚と密接な関係のあるものがそれぞれある。

たとえば太田は亡くなる前年の一九四一年秋からとくに虫に対する興味が湧き出てきたようで『民間伝承』の通

信の中で連続して三回ふれている。

念願してゐた蟋蟀を闘はず遊戯を見る機会がありさうです（一九四一年十月）。

目下虫のシーズンで支那人が虫を小さな盒子に入れてポケットに入れているのを興味あるものと感心して、私も金鈴盒子というのを一具買って虫を飼っています（同十一月）。

寒さに向うとともに支那人の愛虫家達は小さな器に虫を入れポケットにしるばせています。多くは金鈴です、体温によつてあたためられて静かな音を聞くなど、中々風流な人達です（同十二月）。

さらに花の香が移つたお茶に関する記述から、太田の考え方、感じ方が変わっていく様子を窺うことができる。

「最近になつて茶をよく見ることが出来る、だが吾等はどうな場合でも支那茶はのみたくない、何処迄も日本の茶がほしい、茶葉がなければむしろ白湯ですましたい」⁽⁵⁴⁾（一九三九年三月）というように、太田は最初中国のお茶をまったく拒絶していた。しかし、それは次第に変化し、一九四二年春になると、「ただ茶のみは今宵も支那茶を喫しつづ筆を執つていますが、四年の歳月は花の香ある茶にすつかりしたしみが出来ました。何故にこの種香茶が日本に流布しなかつたか自分の疑問とする所であります」⁽⁵⁵⁾と、むしろ中国茶に愛着を持つようになった。

中国に対する理解が深まるにつれて、太田は「要するに支那といふ国は広大でどこ迄も不可解であり三年五年あて支那を解しようなどは、大きな誤りである」⁽⁵⁶⁾と自覚するようになった。

自分の中国理解を制約するものがあると太田は認めている。たとえば日本では熱心に研究していた民謡や口碑などの口頭伝承について、太田は「支那に来て四年、各地を踏んではきたがそれは軍人としての行動で単なる旅行者

でないために支那の民俗学的な事象については留意はしたものの、それは単に外面のみで、民衆の持つ内在的な口碑伝説には、あまりふれる機会に今日迄めぐまれていない」(一九四一年)⁽⁵⁷⁾と自ら反省している。しかしそこには軍務による時間の制約以外、言葉の障壁もあった。『民間伝承』五一一(一九三九年十月)に載せた通信の中で、太田は「色々と支那の風俗について聞きたいと存じますが、まったく教育が普及してゐない為め簡易な筆談も困難」である」と述べている。

中国理解を深めていこうとした時であったが、まだ中国語の会話はできず、研究は故郷農村での生活経験、長年の調査で培った感受性と観察力、また中国と日本で共通している漢字⁽⁵⁸⁾に頼っていたことが想像できる。日本民俗学の民俗語彙重視という方法が、言語の障壁にぶつかったことになる。それゆえ太田は漢口江岸の魚市の場面が描けても、そこにおける支配権の分析は出来ず、鵜飼のやり方がわかっても、行き先での漁業権の問題には手を出せなかった。

もちろん、太田は日本の民俗学の動向や中国研究について、常に最新の情報を求めており⁽⁵⁹⁾、隊長である身分で通訳を付ける便宜などもあったのだろうが、しかし調査対象と直接にコミュニケーションすることによって情報を獲得するのが民俗学研究の手法で、言葉が充分通じない太田の研究は、より視覚と直感に頼らざるを得なかった⁽⁶⁰⁾。独学で何とか会話ができるようになった太田は中国滞在の後期、昔話の翻訳(「支那の口碑」)や民謡の収集(「鄭衛余音」)にも努めていた。柳田の提唱する採集の三分類から言えば、「寄寓者の採集」に近づけようとする「旅人の採集」にあたるのであろう。しかし、心意の奥を探るといふ最終目標にはまだ遙かな道のりがある。

さらにそこには言語以前の問題も存在する。太田の中国研究は軍人という身分ゆえできた側面があったが、またそれゆえ大きく制約された一面もあった。一九一〇年に奉天会戦で戦死して靖国神社に祭られている長兄⁽⁶¹⁾を持つ太田は、通信に「昭和十四年三月十日 陸軍記念日の夜十二時」や「十二月二十二日太平洋の大捷を聞き喜びつつ」とわざわざ記すほど、自分の軍人という身分に自覚を持っている。太田は一貫して船舶輸送部隊に属してお

り、真正面から血まみれになって戦う経験がなかったように思われるが、彼の戦争認識を見れば、まず進軍中では「皇軍の進む所、彼等（国民党の圧迫下の民衆―筆者）の幸福が進むわけに外ならない」⁽⁶²⁾との理解を示し、任務が守備に変わった後も「戦争には勝たねばならぬことを痛切に感」⁽⁶³⁾じ、さらに「聖戦幾年、山村に至るまで酒旗に代るに日章旗と和平建国の旗が翻翻として春を謳歌している」⁽⁶⁴⁾と占領中の江南を描写している。この対中国戦争の性格についての認識は決して太田一人だけのものではなく、当時軍部と政府の総力戦政策下で、軍隊ないし国民の中でかなり共通した認識であろう。

しかし本人には侵略の認識がないとはいっても、日常生活においては常に中国人の敵対する態度に出会わずにいられなかったようである。『民間伝承』五―三で太田は子供が生まれて三〇日の行事「弥月」について報告しているが、そこで「こんな時ヒゲは大したもの、集まつた小供達はまつたく小生を伯叔父なみにヂヤレック有様で、小供には何の異国人否敵国人としての感念もありません」と述べている。逆にいえば、この「異国人否敵国人」という緊張関係は、無邪気な子供以外には常に感じていたのだろう。それは、たとえば中国を離れて南方に移転してから寄せた初通信の冒頭で太田が「馬來に来て感ずることは人々の皇軍に対する好感」⁽⁶⁵⁾と述べているところからも裏付けられる。

民俗学は心意の奥に接近することを究極の目標とするが、軍人でもある研究者と支配される村人との間に、軍事的強制力への配慮による協力はあっても、調査に必要な信頼関係は築かれにくい。一九四〇年末、太田は『宗』と『家』との二つの区分による制度に大変意義のあることを感じます。これが或は支那人の起返る一つの大きな原因をなすものがないか等もすこし研究してみたい」⁽⁶⁶⁾と述べ、「本年は当地方も不作に属する様です。一畝（我国の七〇％）の佃料（小作料）が一担（約五斗五升）の由（中略）すこし農村の様子も知りたいとつとめています」⁽⁶⁷⁾と抱負を語り、中国の宗族制度や農村の経済制度にも関心を抱くようになったが、しかしこれらのテーマについての研究は結局進まなかったのも、それが一つの理由だと思われる。

3 日本への発信

以上のような制約があるにもかかわらず、柳田は太田の中国研究を高く評価している。

一九四三年九月、柳田は『支那習俗』の序で、当時中国に関する出版が多い中で太田の中国研究の「二三の特長」として、第一に「此著は細心なる実地の観察に基づき、しかも色とりどりの都府の風流には目を仮さず、大むねくすみ切つた片田舎の、貧しい生産者たちの毎日の営みを、倦まず軽んぜず堅からも横からも、見て取り写して残さうとしたことに、先づ我々は一つの価値を認めて居る」こと、第二に「搜しても他には似たものが無からうと思ふ一事は、此書が日本の民俗学の学徒によつて専心に書き綴られたといふ点」をあげている。

前者はまさに柳田が主張している民俗学の研究方法そのものであり、後者ははっきりと太田の業績を民俗学の内部から受け止めている。つまり太田の中国研究は、対象こそ中国であるが、日本の民俗学者が日本民俗学の方法をもつてなされたものだと柳田は位置づけている。

実際、太田の中国研究が当時の日本民俗学の一部であったことは、『支那習俗』の出版を待つことなく、彼の研究が最初から機関誌『民間伝承』と民俗学の有力誌『旅と伝説』に掲載・紹介されていることや、これらの雑誌が戦地に届けられ、それによって、太田は常に日本国内の民俗学研究と緊密な関係を持っていたことから見てもはっきりしている。

彼の最初の報告に対して、『旅と伝説』の「後記」や『民間伝承』では、わざわざ取り上げて読者会員の注意を呼びかけていることは既に述べた通りである。しばらく後の「中支奥地の鵜飼」についても、同号の『旅と伝説』の「後記」に「又遙か戦地から太田氏が第三回目の中支奥地の鵜飼を寄せられました」とあり、『民間伝承』でも「戦塵中の報告。豊富な写真を入れたスケッチであり、漁法の大要を尽くしてある弾雨下の氏の学問愛を沁々と感ぜしめられる。武運長久を祈つてやまない」と紹介されている。

表11 『民間伝承』と『旅と伝説』に見られる太田陸郎関係内容（一九三八～一九四三年）

年月	雑誌・号数	主な内容	備考（頁数、写真・図点数、所属変更など）
一九三八年 八月	『民』三一―二	近畿民俗学会による太田応召の報告	
一九三九年 一月	『旅』一―二―一	「進軍中にみた支那習俗（一）」、「後記」 倉田による上の報告の紹介	九頁、図五、写真二、中支派遣片村部隊北尾部隊
二月	『民』四―五	倉田による上の報告の紹介	九頁、手描図一、写真十一
三月	『旅』一―二―三	「進軍中にみた支那習俗（二）」、「後記」	四頁、手描図一、写真六
五月	『旅』一―二―五	「中支奥地の鵜飼」（昭和十四年三月十日、陸軍記念日の夜十二時）、「後記」 倉田による上の報告の紹介、通信・戦地に春、鷺通信・記録困難、食、農業、藍麩、薪、竹縄	中支派遣片村部隊北尾部隊 一年ぶり『民』を拝見
六月	『民』四―九	通信・記録困難、食、農業、藍麩、薪、竹縄	中支派遣片村部隊檜垣部隊
七月	『民』四―一〇	通信（七月十日）…中日の習俗が類似	一年ぶり『民』を拝見
九月	『民』四―一二	通信…孟蘭聖会、筆談困難、参考文献皆無	中支派遣片村部隊檜垣部隊
十月	『民』五―一	通信…弥月、子供習俗	
十二月	『民』五―三		
一九四〇年 一月	『旅』一―三―一	「中支より」（昭和十四年十一月二十二日）	三頁、写真四
二月	『民』五―五	「参考文献」で上の報告にふれられる	
三月	『民』五―六	通信…薬のふとん、綿、ことばの一致	五頁、写真八
四月	『旅』一―三―四	「中支奥地の旧暦歳末」もう二日すれば正月	中支派遣田村部隊檜垣部隊
五月	『民』五―八	通信…正月、春聯を一つ紹介	
七月	『民』五―一〇	通信…孤猿随筆読了、犬のこと	『民』九号拝受
八月	『民』五―一一	通信（六月十七日）…雨乞、スッポン、炎天下	
九月	『旅』一―三―九	通信（八月八日）…暑さ、ゴザ、市街地の繁昌	『旅』拝受
十一月	『民』六―二	通信…今日中秋節、贈答品、博打、食物	

十二月	『民』六一三	通信…「宗」と「家」の制度に興味	
十二月	『旅』二三一一	「中支より」（山窩のことども）	二頁
一九四一年			
一月	『民』六一四	通信…小作料、小作人の地位	
三月	『民』六一六	通信…今日旧正月三日、旧暦使用、内地との相違	『民』六一四拝受、中支派遣田村部隊光井部隊
四月	『民』六一七	通信…若草摘み、種類、食べ方	三頁、図一
七月	『旅』一四一七	「揚子江と倭寇（現地検閲済）」（昭和十六年孟春）	『旅』七月号拝受
八月	『旅』一四一八	便り（七月十二日）投稿遅延。「後記」	
九月	『民』六一二二	通信…農作業、寸分変わらぬ	
十月	『民』七一〇	通信…稲刈り、蟋蟀を闘はず遊戯	『民』六一一 一拝受
十一月	『民』七一二	通信…仲秋、虫を飼う金鈴盒子	『民』六一二 二拝受
十二月	『民』七一三	通信…冬服に蚊帳、愛虫家達の風流	『民』七一 一拝受
一九四二年			
二月	『旅』一五一二	「揚子江流域の魚と漁法（現地検閲済）」（十二月二十二日、太平洋の大捷を聞き喜びつつ）	十二頁、手描図五、写真十八
九月	『民』八一五	通信…皇軍に好感、村の団結、宗教、言語、昔話	於馬来
十月	『旅』一五一〇	通信…暇なし、民話、ドリヤン、魚類。「後記」	馬来派遣、暁二九五八部隊
十一月	『旅』一五一二	通信…手紙不便、興味多い、文字、禪、果物	同前
十二月	『旅』一五一二	「後記」	十一月十八日作成
一九四三年			
二月	『旅』一六一二	宮本弔文	一九四二年十一月二日作成
五月	『民』九一〇	敬弔	
十二月	『民』九一八	橋浦による『支那習俗』紹介兼弔文	
十二月	『旅』一六一二	『支那習俗』紹介	要目あり

註…『旅と伝説』は『旅』、『民間伝承』は『民』と略記する。年月欄は雑誌の発行年月である。

一九三八年から一九四三年まで『旅と伝説』及び『民間伝承』に見える太田の投稿、通信及びその紹介、後記やその他太田と関連する内容は表11を参照されたい。

太田は雑誌への投稿以外に、展示会に写真を出品するなど、積極的に中国研究の成果を示していた。一九三九年十月、関西学院大学創立五〇周年の記念活動の一つとして、年中行事・民間信仰・民俗芸術（子供の世界）・民具及び生活・郷土資料など五つの展示室からなる日本最初の民俗展覧会が行われ、各地郷土研究会から機関誌や刊行物が寄贈され、近畿とくに兵庫を主として、岐阜、徳島、新潟や東京からの出品があった。目を引くのは、当時中国にいた橘文策⁶⁸と太田からも出品があったことである。郷土資料という展示室に、国内外の出土品、日本民俗学の発達を語る文献、地方郷土研究雑誌、方言分布図、日本と世界の頭上運搬・父親分婉習俗分布図や柳田の著作書と並んで、「中支戦線の太田陸郎氏の、写真出品あり、中支の民俗と、日本の相似を理解することが出来た」⁶⁹と報告されている。

3 太田陸郎の中国経験と日本民俗学

太田陸郎は、大学出身のエリート知識人であり、また郷里の生活の細心な観察者であり、郷土史料の熱心な蒐集者でもあった。一九二〇年代後半、彼は早くから民謡や方言など民俗学的な事象に関心を持ち、しばしば新聞雑誌などに投稿した。兵庫県庁勤務の傍ら、三〇年代前半で、彼は地元の神戸で兵庫県民俗研究会を組織し、良質な地方民俗雑誌『兵庫県民俗資料』の編集に精力的に取り組み、郷土史関係の古い資料を多数復刻して解題をつけ、また多くの論文、報告を発表し、貴重な民俗資料を残した。

一九三〇年半ばから、柳田を中心とする日本民俗学の組織化の過程に積極的に参与した太田は、『近畿民俗』の編集に携わる傍ら、民俗講習会や例会など近畿地方の民俗学会の活動にも取り組み、日本民俗学の地方組織者とし